

8章まとめ(1)
第1節 こどもの身体表現と促進法

	必要な能力	身体表現：模倣表現、自由表現
1. 幼児・児童における未来型能力	なぜ未来型能力か？	<p>現代社会における幼児期の子どもが置かれている状況を検討し、子どもたちが実際に生活している地域の特性を活かした身体表現及び状況変化の著しい社会でも適応可能な未来型の子どもの身体表現のあり方→模倣と自由表現。</p> <p>現代社会の状況を鑑みると、ますます複雑な状況への対応が求められると考えられる。その際に、たとえば、模倣課題の一部であるが、上手にポーズの模倣できるということは、実生活で役に立つ一面もある(例えば、火事の際にハンカチやタオルで口を押さえながら身をかがめながら逃げる、雷のときに腹這いにかがむなど、など)。</p>
	現状の把握 (当該領域のオリジナルデータ・知見)	<p>【模倣表現】年少児は、おおまかなポーズの模倣は可能であるが、細かい点およびバランスを要する動作の模倣は、年長児の方がうまくできていた。</p> <p>【自由表現】いずれの年齢段階の子どもたちものびのびと行っていたが、身体表現のレパートリーとなると、年長児の方がより豊富なレパートリーが見られた。音や言葉という実態のないものだけで、イメージ豊かに表現活動ができる。</p>
2. 幼児・児童における未来型能力の育成	育成方法の提案・実施	子どもたちが実際に生活している地域の特性を活かした身体表現(子どもたちに身近な生き物や自然現象を使用するなど)と環境が変化しても対応可能な身体表現との両面を活かした能力育成システムを考えていくことが大切。
	育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見)	未実施であるが、子ども達にとって身近な生き物や日常的な人工物をモチーフにした、五感のさまざまなモダリティを用いた実体験に基づいた身体表現の課題を今後の課題として考えていきたい。
3. 未来型能力を指導できる指導者育成	現状の把握 (当該領域のオリジナルデータ・知見)	子ども達の日頃の様子から、どのような身体表現の活動に意欲を持つのかをとらえる力を育成できるかを基に、模倣の部分と自由表現の部分とに即した身体表現課題を考えていく。
	育成方法の提案・実施	<p>【模倣表現】次のポーズをまねてもらうときには、各部位のポイントを示すと効果がある。複数の動作をおこなうときには、やりやすい順序をも示す。バランスの要する動作については、年齢を加味したアドバイスが必要、などである。</p> <p>【自由表現】表現したいという意欲をくみつつ、その一方で、表現のバリエーションが広がるように働きかける。</p>
	育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見)	未実施であるが、模倣の部分と自由表現の部分とがうまく融合できるような身体表現の課題ができればと考えている。